

モーツァルトに会いたい 3

モーツァルト・マニアック

conversations with Mozart



ピアノ = 河野 美砂子

朗 読 = 谷川 俊太郎

2008年3月10日〈月〉

夜7時開演(6時30分開場)

京都芸術センター 講堂

四条烏丸(24番出口)から西北へ徒歩5分(室町通錦上がる東側)

※京都芸術センター共催事業

前奏曲(カプリッチョ)K.284a	ハ長調 (1777年)
ロンドK.511	イ短調 (1787年)
指の練習K.626b/48	ハ長調 (1788-9年?)
アレグロ(ソナタ楽章)K.312	ト短調 (1790年)
ソナタ K.533+K.494	ヘ長調 (1786年-88年)他

「モーツァルトに会いたい」シリーズ3回目の今回は、モーツァルトの作品の中でも意外な面に光をあてます。いわゆる〈モーツァルトらしさ〉とは異なった曲や、演奏されることの少ない、けれど魅力に満ちたピアノソロ作品を中心としたプログラムです。はからずも、晩年の作品が多くなりました。

谷川俊太郎さんは、その長年の詩作のなかで、詩集『モーツァルトを聴く人』(1995年)があることからわかるように、モーツァルトファンとしても長いキャリアをお持ちです。言葉を生み出すプロとしての朗読やお話は聞き逃せません。もと明倫小学校の歴史ある空間と、約100年前の楽器・ペトロフの響きとともに、新しい音楽会の形をお楽しみください。

■ チケット

一般 3,000円 学生 1,500円 (当日各500円増) 自由席・200名限定

■ 主催・申込・問い合わせ/コンサートモーツァルト

※受付次第、振込用紙同封の上、チケットお送りします。

電 話 075-432-9070 (月-金曜日/10時-17時、土曜日/10時-12時、年末年始は休み。)

ファクシミリ 050-1359-4384 E-mail conmoz69@ybb.ne.jp (ウェブサイト「紫野通信」からも入れます。)

「宿題」

河野美砂子

長野県戸隠での恒例行事、「お話と朗読と音楽の夕べ」は、今年でもう八回目になる。

河合隼雄さんのお話、谷川俊太郎さんの詩の朗読、それに私のピアノ、という舞台、みずみずしい緑のこの季節、印象的なエピソードとともに、得がたい時間を過ごすことができた。

この会は、編集者だった山田馨さんという人が、戸隠の喫茶店「ランプ」を世に広めよう、と考えたのがそもその始まり。山田さんが河合さんや谷川さんを巻き込んだ、という形で、今では、谷川さんは「戸隠ありつけ」という地元の会のCEO（会長）に就任するほどだ。

今年は「木」がテーマで、「木とともに生きる」（河合）、「樹木昇天」（他（谷川）、「武満徹「雨の樹」など（河野））、充実した内容だったと思う。

2時間ほど皆がプロとしての仕事をした後、実はこの会独自の趣向があって、河合氏のフルート演奏、谷川氏は歌を披露。

最近はお二人ともそれぞれに進歩のあと著しく、今回は、私も含めて三人が一緒に演奏できるよう、「宿題」（詞・谷川俊太郎、曲・谷川賢作）を私が編曲した。

リハーサルではバッチリうまく行っていたこのトリオ。が、私のソロの間奏がややこしかったせいも、まず谷川さんが3番の入りを持ちかけ、続いて河合さんも路頭に迷い……これはなかなかの事件で、絶句する谷川さん、あわてる河合さんの姿は、通常そんなに見られるものでない。

でも、さすが大人たいじん二人。普通のオジサンが二人してオロオロしたら目も当てられないが、そこはその存在感がモノを言うのであって、お客様には大ウケだ。

来年に「宿題」は持ち越し、と谷川さんが最後に締めくくりにめでたく終わったのでした。

河野美砂子 こうのみさこ

京都市立芸術大学卒業。

同大非常勤講師。

ウィーン国立音楽大学に留学。

88年淡路島国際室内楽コンクール優秀賞。

井上直幸、E.ウェルバ、フライブルクのP・アクセンフェルト各氏に師事。

帰国後、リサイタルシリーズ『シューベルトとシェーンベルク』を京都、大阪、東京で開催した他、ベートーヴェンの全チェロソナタ、ヴァイオリンソナタ、『ベートーヴェンとの対話』（ピアノトリオ全曲演奏）等を企画演奏している。

95年第41回角川短歌賞。

04年第一歌集『無言歌』（砂子屋書房）により、第5回現代短歌新人賞受賞。

『モーツァルトに会いたい』は、06年11月にソロ演奏会を開催。07年夏の『モーツァルトに会いたい②・室内楽』では、「ピアノトリオ」（Vn.岸邊百百雄、Vc.河野文昭）と「4手のピアノ曲」（Pf.小林道夫）の2回を開催した。

谷川俊太郎 たにかわしゅんたろう

1931年、東京生まれ。

都立豊多摩高校卒業。

1952年、第一詩集『二十億光年の孤独』出版。

以後詩、エッセイ、脚本、翻訳などの分野で文筆を業として今日にいたる。

詩集に『21』、『落首九十九』、『ことばあそびうた』、『定義』、『みみをすます』、『日々地図』、『はだか』、『世間知らず』、『minimal』など、エッセイ集に『散文』、『ひとり暮らし』、絵本に『わたし』、『ともだち』、『もこもこもこ』などがある。

谷川賢作との共演も多く、CD『クレーの天使』、『家族の肖像』などが出ている。

最新刊は詩集『シャガールと木の葉』、『すき』、『歌の本』、『詩人の墓』など。

古いものが生む新たな「場」

河野美砂子

（…前略）

古いものを大切に長く使うという例で私が思い出すのは、もと京都市立明倫小学校（現京都芸術センター・室町通蛸薬師下る）に伝わる約百年前のチエコ製のグランドピアノ「ベトロフ」である。

私がこの楽器に出会ったのは二年前で、センター主催の現代短歌ワークショップ「音・ことば・歌」で講師を務めた時だった。弾いてみて、現代の機能的なフルコンサートグランドピアノにはない、妙味ある音色に驚いた。誰がどのように弾いても良い音がするというよりも、この楽器から良い音色を引き出そうとする弾き手を求めている、と感じた。もと小学校の古い校舎を改装した空間も、この楽器の良さを生かしているようだ。

ただ修理が必要とのことだったが、何より心動かされたのは、地元明倫学区の方々が、この楽器を何とか大切に使い続けたい、と「ベトロフの会」として活動されていることだった。修繕費約二百万円を、こつこつとコンサートを開きながら寄付で募っているという。

一方、私は私でなんとかこの楽器の良さを生かした演奏会を開きたいと思うようになった。音色的に、それは迷いなくモーツァルトだった。昨年十一月「モーツァルトに会いたい」と題し、その生涯をたどるピアノソロ作品による演奏会を開催。一回きりのつもりが、その音楽と楽器と、それから「場」の持つ空気を気に入られた多くの方々の声をいただき、今年六月、七月に「モーツァルトに会いたい②・室内楽」を催し、来年三月には、谷川俊太郎氏の朗読とともに「モーツァルトに会いたい③」を予定することとなった。

古いものをただ残すのではなく、手入れしながら使い続けていく、という点が大切なのではないかと私は考えている。それは時に、モノと人との関係を越えて思わぬ「場」を生み出すことがある。

古いものを丁寧に使い続けるにはエネルギーが必要だが、それだけの価値あるものを残すのみに終わらず、ぜひこれから新たに生み出してもいきたいものだ。